

諭吉は又、どうかしてアメリカへいつてその國の様子を見たいと思つてゐましたが、折柄幕府では、日本の軍艦に使をのせてアメリカ合衆國にやるといふ事になりましたので、どうかしてこれと共にアメリカへ行つて見たいと思ひ、幕府にねがつて許されました。諭吉は喜び勇んで軍艦に乗りこみ、太平洋を横切つてアメリカは合衆國へと向ひました。

アメリカへ着いてからは、いろ／＼その國の様子から機械などのことをよく観察して歸りました。

歸つてから、幕府の外國方(今の外務省)に雇はれて、外國から來る書面などを見る役になり、傍ら英語を勉強してゐました。後幕府から命せられてヨーロッパに行く使に從つて歐洲各國を巡ることになりました。その手當として貰つて四百兩の金の中から、百兩を國の母に送り、さてそれから佛蘭西、英吉利、和蘭、獨逸、露西亞を巡つて日本に歸りました。歸つてから世のために大いに貢献した『西洋事情』といふ書物を

著しました。

その中に幕府はたふれて、明治維新の新政府は出來ました。そして政府からは、諭吉を用ひようとしてましたが、諭吉はことはつて出ず、自分は弟子を教育しようと思つてゐました。

そこで新たに諭吉は慶應義塾を設けました。後にこれを三田に移しましたが、これが今の慶應義塾のもとなのです。

かへてそれから、たゞ／＼少年青年を教育することに一身を委ね、かねて多くの書物をこしらへて、世の中を益することに力をつくしました。

△ 新 島 襄

確乎として抜くべからざる信仰、沈重にして廉潔なる品格、積誠至愛の行爲、實に新島襄は我々の學ぶべきよい模範であります。實にこの新島襄は温厚篤實にし

てかつ忍耐精勵、以つて自分の信する宗教をひろめ、子弟を教育するに諄々として倦まず、自分の身を主義のために献げた人といつてよろしい。

新島襄は上總安中の舊藩士、新島民治といふ人の子で、天保十四年に、江戸で生れました。幼名を七五三太と呼び、二十歳の頃、襄と改めました。

二十一歳の頃、どうかして英語を學びたいと思つて、その頃外國人が函館に多くゐたものですから、そこへいつて外國人に英語を教へて貰はうと思ひ、江戸を出ました。所が先生とすべき人を探しても見當らず、その中持つてゐた錢は少なくなつてしまつて今は生計のために金を得なければならぬやうになつて來たものですから、或る外國人に雇はれて、日本語を教へることゝなりました。この時心の中に、西洋の學問をしようと思へば、どうしても外國へいつて十分研究をせねばならぬ。どうかして外國へ學問を研究しに行きたいものであると思つてゐましたが、當時外國へ行くことは堅く禁じてあつたものですから、どうも仕方がありません。併しながら、一旦思ひ立つては

中々その心が止みません。そこで或る人の世話になつて、そつと隠れて外國の船に乗りこみ、日本を出て行くことになりました。見つけられては大變ですから、外國船の荷物の中に隠れてゐました。船が出て行く前に、日本の役人が船を検べましたが、幸にも襄は見出されずすみしました。間もなく船は出て行きましたが、襄は船の中でボーイとなつて乗客にやかましく叱られながらつとめ、或ひは水夫となつて非常な勞働をしたり、いろ／＼な苦しみをしました。上海までいつて、こゝで米國行きの船に乗りかへ、船長にいろ／＼頼んでやつとのことのでボーイとなることが出来ました。一年ばかりも船にゐて、やがて米國ボストン府につきました。こゝで船長の世話で、ハーデーといふ人が襄の熱心なのに感心して、自分の子と同様にして學資金を出してやる

このことでありました。これ偏に襄が熱心の賜物であつたのです。かくてアンドヴァ中學に入り、熱心に勉強してそこを卒業し、アーモスト大學に入りこゝも數年の後にめでたく卒業をしました。

明治四年になつて、特命全權大使岩倉具視の一行が、米國にいつた時、襄は招かれて隨行員となり、米國をはじめ、英吉利、獨逸、佛蘭西、露西亞、和蘭、瑞西、丁抹等の諸國を巡り、學校のことやら教育のことについて、詳しく調べました。襄が、日本に歸つた後は私立の大學をたて、日本のために盡さうといふ心は、この時堅く決せられたのであります。

岩倉公使一行が歸朝してからも、襄はアンドヴァで勉強して神學を修め、遂に神學士の學位を授けられました。

かくて業を終へたので、襄は日本へ歸らうと思つてゐました折柄、或る所の集會で別れの演説をし、尙歸朝して立派な私立の學校を建てようと思つてゐるから盡力を願ひたいとの事をのべました所が、その熱心に感心して、多くの紳士貴女たちから、卽座に數千圓の寄附を受けました。

やがて日本へ歸つて來ますと、既に襄の學問に深いことは知れてゐますから、岩倉公

はじめ多くの人々から政府へ出て役について貰ひたいと頼みましたが、襄の決心は私立の立派な學校をたて、人を教育しようといふのでしたから、それを承知しませずそれからはあちらこちらと奔走して、學校をたてる事に力をつくしました。かくて出來たのが、今京都にある同志社であります。この同志社を設けることや、ついでこれを私立大學にすることに、襄の骨折りは實に一通りでありませんでした。あまりの艱難苦勞のためか、明治十七年頃身體大いに衰へ、人のすゝめに従つて再び歐米の諸國に遊びましたが、その瑞西にいつてゐた時などは、病がにはかに烈しくなつて、最早息も絶えんばかりになつた事がありました。幸にも危険をまぬかれましたがこの旅行から歸つて來ると、直ちに私立大學を設立する運動にとりかゝりました。その時など、度々目くるめきて、倒れるやうなことが度々でしが、そんな事を物ともせず、たゞ々々大學設立に身も忘れんばかりでありました。所が天はこの熱心な偉人に天命をかさず、大磯に療養中四十七歳でなくなりました。時に明治二十三年一月で

ありました。今左に、新島襄の言行の二三を記します。

最初襄が蘭學を學ばうとしました頃は、まだ世間の人は西洋の事を知りませんから、蘭學を非常に卑しき斥けて、嘲るやら止めるやらでしたが、襄はただくその方に心を傾けてゐました。所がその頃、追々と藩の用事が多くなつて、その忙しさに勉強をする暇がなくなりましたから、襄は氣がふさいで毎日不愉快でくたまりませず遂に病氣となりました。醫師に見てもらふと、

『あなたの病氣は精神がふさぎ勝ちだつたから起つたのです。よく運動をして、心を愉快にお持ちになつたがよろしいでせう。』

とのことです。そこへ藩主から、養生をするやうにといつて暇をたまはり、その上幾らかの金をも下さつたものですから、襄はその金で蘭語の書物を買ひ、日日勉強しました所が、何時の間にか病氣はなくなつてしまつたといふことです。

或る時のこと、襄は一人の紳士と共に船に乗つてゐた時に、その紳士が襄に酒をすゝ

めしました。すると襄は、

『何百人といふ學生に、酒をのむなといつておきながら、自分からこの禁酒を破ることは出来ません。』

といひますと、紳士は、

『こゝは船の中の事です、あなたが酒を誰まれたつて、飲れも知る者はありません。』すると襄は、

『人が知らなくても自分の良心が知ります。』

といつたので、その紳士は顔赤らめて再びは進めませんでした。

又或る時、襄が或る人にあて、出した手紙に、

『尚々襄が今日あるは、此の三十餘年間堪忍の二字を守りし事は自ら發明いたし居り候て、忍は矢張り卑屈とは違ひ候て、世に勝つの大元素なりと存じ奉り候。』

といふことが書いてありました、實に襄は三十幾年の間、この堪忍を守つたがために

遂には名をあげるやうになつたのでした。
又或る人にあてた手紙の中に、

『男子一戦して敗るゝも已む勿れ。再戦して已む勿れ。三戦して已む勿れ。刀折れ矢
つきて已む勿れ。骨くだけ血盡きて已むべきのみ。真理のためになげうつにあらす
んば、吾人の生命も亦無用ならずや。』

とありました。これこそ身を立て事をなさうとする者の、一日も忘れずに守るべき事
であります。

襄が、はじめ外國船にのつてアメリカへ渡る時、船のボーイとなつてゐましたが、そ
の時のこと、一人の客が襄を呼んで、枕を持つて来いと命じました。所がこの頃襄は
まだ英語になれてゐなかつたのですから、度々問ひ返しました。すると客はうるさ
かつたと見えて、枕をふり上げてひどく襄の頭をうちました。襄はもと武士の家に生
れて、猛烈な氣象をもつてゐたものですから、非常に腹を立て、直ちに自分の室へ

はいつて脇差を抜き、その客を刺し殺さうと考へました。暫く考へてゐると、ふと頭
の中に、

『自分がこんなに苦心して船で渡るのも、長い年月の間の希望を遂げんためである。
それに今、怒りにまかせて彼れを殺すやうな事があれば、その目的はもう破られて
しまはねばならぬ。あゝ過つてゐたく。』

といふ考が起つて、遂にその心をしづめました。又その船長が、襄に汚れてゐる足を
洗はした時なども、襄は残念でたまらず、自分で腹かき切つて死んでしまはうとまで
思つた位でしたが、自分の抱いてゐる大志を思ひ出しては堪忍してゐたといふこと
です。

△古川市兵衛

『神も艱難なくして英雄を作ること能はず。』といひ、『難艱汝を玉にす』といふこと。

ほり、人は艱難に逢はなければ到底立派な者とはなれません、攻めくる艱難と戦つて、それに敗れてしまふものは敗者となつて遂に世の中へ埋められてしまひ、これに勝つた者は勝者として世の中に花を咲かすのであります。

古川市兵衛の如きは眞に艱難と戦つて一豆腐賣から上つて銅山王とまでいはれるやうになつた人です。

古川市兵衛は京都岡崎村の人で、天保三年に生れました。幼い時の名は巳之助といひ後に幸助と改め、最後に市兵衛と改めました。もとの姓は木村といふのでした。

幼い時から豆腐を賣り歩いてゐましたが、つくづく自分の身の上を考へて、

『高が豆腐賣りでは出世した所が知れたものだ。こんな小さな商賣をしてゐては到底頭の上る目はない。なんでも一つ奮發して大事業に志ざらねばならん。』
と思つてゐました。

十八歳の時、市兵衛は僅か三分二朱の旅費を懐にして數百里をへだてた奥州盛岡さし

て出て行きました。盛岡には叔父にあたる人がゐたのです。そこで暫らく世話になつてゐるうち、盛岡にあつた大阪の鴻池の鴻池銀行支店に備はれることになり、忠實に働いたためやうやく信用を得るやうになりました。後生絲商の古河太郎左衛門といふ人の養子となりました。養父は小野組にはいつてゐましたから、市兵衛も亦小野組にはいつて生絲の買占め方につとめました。その機敏なには養父もびつくりしたといふ事です。後父に代つて小野家の絲店を引き受けてやつてゐましたが、その頃は主として西陣の方へ糸を賣つてゐたのですが、すばしい市兵衛は京都よりも横濱の方が利があると見てとつて、ひそかに横濱の外商に賣込んでみました所が、果して大利益を得ました。そこで主人にわけを話して相談すると、主人も大いに感服してその意のまゝに任しました。そこで二萬圓内外の資本をもつて、一ケ年に七萬圓ばかりの利を得ました。

後に蠶卵紙の直輸入をやつて立どころに三十萬圓餘の金を儲けました。

明治七年になつて、遂にこれまでの生絲商を止めてしまつて、華族の相馬家の持つてゐた新潟縣の草倉銅山の下受をすることになりました。所がこの銅山はあまりよく銅が出ませんので、一旦は止めやうかとも思ひましたが、忍耐心の強い彼れは、たゆまず掘つてゐますうち、遂に多くの銅が出るやうになつて來ました。次いで幸生の銅山を買入れ、明治十年には足尾の銅山を買ひ入れ、後には六十九ヶ所の鑛山を持つやうになりました。その足尾銅山の如きは、はじめ産出が少くてとても引き合はぬので持主が困つてゐる所へ大膽にもそれを譲り受けようといふので、持主は大喜で譲り渡しました。この時市兵衛は、

『引き合はぬといふのは手段がわるいからだ。おれがうまくやつて見せる。』

といつてみたさうですが、果せるかな數千人の工夫を備つてどん／＼掘つて行くうちに、遂に東洋一の銅山といはれる程多くの銅を出すやうになりました。

川崎正藏

人間には、時に瘦我慢も必要であります。夏暑いからといつて直ぐ弱つて暑がり裸になつてばかりゐたり、冬寒いからといつて直ぐ炬燵の中へはいるやうではいけません。痛いことにも痛がらず、恐ろしい事にも恐れぬといふ瘦我慢は、人にとつて非常に大切なことです。この瘦我慢があると、膽力がなくても膽力ある人と共に事をやることも出来るし、困難な場合に立つてゐても少しも弱る事なく、遂には成功の光をはなつことが出来ます。世に立つて大仕事をなし遂げようとする人にとつては、この瘦我慢も必要であります。しかしながら、この瘦我慢が悪い方へ走つてはそれこそ仕方がないものとなります。人から義理知らずといはれても、悪人といはれても、この瘦我慢を出して自分の悪行を改めぬやうではなりません。人が生活して行くのに一日もなくてはならぬ火や水も、使ひやうによつ

ては人の命をとつてしまふこともありますから、瘦我慢も大いによい方に使つて行かなければなりません。
今こゝにお話ししようと思ふ川崎正藏の如きは、この瘦我慢をよい方へ使つた人といはなければなりません。

川崎正藏は幼い時の名を磯次といつて、天保八年即ち今から凡そ八十年ばかりも前に鹿兒島で生れました。父は呉服商を業としてゐました。祖父さんの代までは、家の財産も相當に澤山あつて、親類中でも第一番であつたのですが、お父さんの時になつて財産が非常に少くなり、とうとう親類中で第一番の貧乏となつてしまひました。正藏は幼な心にもこれを非常に残念に思つて、どうかして行く／＼は立派に家をおこして、もとの通りになつてみたいものだ、堅く心に決めてゐました。そこで何か一つ事業をおこさうと思ひ、琉球の方と貿易をしようと思つて覺悟をきめました。所が今のやうに大きな汽船もありませんから、遠く離れた琉球へ往き來するには中々危険な事が澤

山あります。それをまだ十三歳ばかりにしかならぬ子が、やつて見ようといふのですから、家内の人は大層心配して止めましたが、一旦思ひ立つたことを止めぬ正藏は中々きません。遂に十三歳の時、琉球貿易の初旅に上りました。かくて十七歳になるまで四年間といふものは熱心に商業をやつてゐました。かうしてゐるうちに、彼れは心の中で、

『日本の國內で小さな商賣をしてゐるやうでは駄目だ。同じ商賣をするからには、外國人相手の海外貿易をせなければならぬ。』

と思つたものですから、幾らか貯へてゐた金を懐にして、十七歳の時長崎に出て行きました。長崎といへばその頃外國貿易の本場であつたのです。こゝで又十年あまり熱心に貿易に従事しました。

年三十四五歳の頃、鹿兒島行の船にのつて長崎を出て行つたことがありました。この船は日本の船の風と西洋の船の風とをませ合せて拵へた合の子船であつたのです。所

が初めのうちは風もなく海上穩に進んでゐましたが、暫くすると非常な大風が吹いて来て、山のやうな浪が逆捲いてよせて來ます。船はまるで木の葉のやうに吹きまぐられ、帆はちぎれ帆柱はをれ、今にも波を破つて海底へ沈んでしまふやうで、乗つてゐる人は一人として生きた心地もなく、ぶる／＼ふるへ上つてゐました。かくて七日七夜の間といふものは大浪にも遊ばれ、遂に種子島に流れついて、一同は幸にも命を拾ひました。この時正藏は心のうちで、

「これ程の大波にも舟はくつがへらずに助かつた。普通の和船であつたらきつと早くくつがへつてしまつてみんなの命は海の底へ消えてしまつたにちがひない。こんど吾々が助かつたのは、この和船に西洋風の所があつたからである。これから日本はどうしても西洋式の船をこしらへなければならぬ。」

と思ひました。そしてそれから後といふものは、商賣をしながらも、どうかして造船の方に力を入れたいものであると、機會をまつてゐました。

明治七年になつて、かねて知り合ひの時の參議大久保利通に、西洋式の造船所をこしらへる志をのぞきました所、大久保參議も大層喜んで賛成をしたものですから、氏は大いに力を得て、それから所々方々と奔走して、いよいよ造船所の基礎を開きました。併しながら、當時日本には造船の技師が一人もありません。どうしたらよいかと思つてゐましたが、仕方がないので横須賀の官設造船所から船大工のやゝ上手なものを願つて來て貰ひ、はじめて價一千圓足らずの小形帆船を受負ひそれに着手しました。その時氏は一人で社長の役目もすれば技師長の役目もする、會計係から外交係まで一人でやつて、ちり／＼まひの忙しさを一生懸命力を盡しました。

それから後十數年間といふものは非常な骨折で、朝は四時から夜は二時まで、色々造船のことに骨を折つて、安らかに眠ることも少い程でした。氏が東京築地及び兵庫に西洋形船の造船所をこしらへたのは、明治十一年の頃でしたが、つゞいて明治十九年になつて、政府から兵庫造船局の拂下を受けて、前の二ヶ所

の造船と合併し、こゝにその造船事業は大発展しました。これが即ち今の川崎造船所であります。

當時日本商界の旭將軍といはれてゐた岩崎彌太郎は、氏の腕前に感服して、共に事業をしたと思つて、一日わざ／＼その家を訪問して、

「一つおれの所へ来て仕事を助けてくれまいか。さすれば將來君も事業をなすのに都合がよからう。」

とのことでありました。岩崎彌太郎といへばその名は商界にひびいてゐたのです。その人に男らしく頼まれたのですから、正藏も我を折つて承知しようかとも思ひましたが、

「いや／＼、人の下について事業をするやうな男らしくないことはいやだ。」

と心の中に思つたものですから、とう／＼それをことはつてしまひました。若しこの時に氏が岩崎の部下についてゐたなら、一生その使用人となつて終つたかも知れませ

ん。しかし一片この瘦我慢があつたため、遂に立派に獨立して事業を成功させることが出来たのです。

かくて氏の事業は著々成功して、明治二十三年には貴族院議員に列せられました。

△大倉喜八郎

昔から「大賢は愚に似たり。」といふことを云ひ傳へてゐます。あまり賢げにしたがり、利口さうに云ふ人の中には、案外賢い人は少く、一見してあまり賢さうに見えぬ人の中には随分賢い人があります。愚かな人は時に賢人をさして愚かな者だと笑ふことがあります。しかし眞に賢い人であつたら、人から笑はれたからといつて、それでその人の價值が下るものでありません。いつか眞に賢いことがわかつて来るものです。

大倉喜八郎の如きは、幼い時には人から薄野呂といはれて、共に遊ぶのさへさら

はれてゐましたが一旦志を立て、骨身をします、働いた結果は、遂に成功し大實業家となりました。

大倉喜八郎は越後國の新發田の人でした。家は質屋を業としてゐましたが、をさない時から一寸見るとたいの子供よりは智慧がたぬやうに見えましたので、近所の子供たちにさへ薄野呂だなどといつて馬鹿にされてゐました。それですから、子供たちもこれと遊ぶのさへ恥としてゐた位でした。

十七歳の時父母ともになくなつてしまつたので、氏は非常に悲しみましたが、

「いや、かうしてゐる時でない。これから大いに志を立て、立派な者とならなければならぬ。」

と決心をしました。丁度その頃近所の人で、養ひ子に貰ひうけたといふ人がありましたが、氏は頑としてこれをきかず、とうとう國を出て江戸へ出て行き、ある商店に雇はれて奉公をしました。六年ばかりの間といふものは、骨身を惜しませずまめやかに

立ちはたりました。併しながら、いつまでも人の家の雇人で居るといふのは大きらひです。遂に二十三の時に暇をもらつて、貯へてゐた僅かの金を資本として、下谷の上野町といふ所に小さな家を借つて魚屋をはじめました。

その頃のことでした、安政の大食饗で困つてゐる者が多かつたので、官から粥をめぐんだ事がありました。近所のもは皆我先きにとそれを貰ひに行きましたが、氏は、

「おれはいくら困つてゐるからといつて、そんな卑しい事はせぬ。」

といつて貰ひに行きません。近所の者たちは生意氣に思つて、

「そんな事がいへる位なら、お前もおれたちに物をくれることが出来よう。」

といひました。氏は家の道具など賣つてためてゐた金二兩をほり出して、

「これをめぐんでやる。お前たちよいやうに分けて取れよ。」

といつて、ぶらりと借家を出ていつたといふことです。さうしてゐるうちに、氏は、
「小さな魚店などは男らしくない。一番奮發して天晴れの商人にならう。」

と覺悟をきめて、横濱へ行きました。柄折維新前の事として、外國から船が來かけてゐた頃でしたから、

『かう外國から船が來かけたら、きつと戦争に必要な武器が入用になるにちがひないこれから一つ鐵砲屋にならう。』

と思つて、すぐ又江戸へかへつて鐵砲屋をはじめました。つゞいて起つた維新前後の戦争に鐵砲は非常に多く賣れて、大儲をしました。それから後は輸出入業に従事して横濱に大きな店をこしらへて盛に商賣をしました。つゞいて明治五年、英國はじめ歐米諸國を視てまはり翌年歸つて大倉組といふのをこしらへ、外國へも支店を出すやうになりました。

かくて大倉の名は日本の實業界にひやくやうになりました。明治三十三年には五十萬圓の資金を投じて立派な商業學校を建てました。

△松平信綱

身を卑賤からおこして智略縦横、遂に徳川三代將軍家光を助けて、徳川氏のもとゐを一層かたからしめた。松平信綱は實は大才子、大智謀家でありました。世に彼れを稱して智慧伊豆といひ、徳にあつかつた阿部豊後守忠秋と共に、群臣中の最も得難き臣と目せられてゐました。智慧を以てすれば幾千百の群臣諸士のうちこの信綱に及ぶものは一人もないと云はれてゐたのです。

併しながら信綱をたゞ智の人とばかり思つてはなりません、彼れは又實に誠實の人でありました。至誠以つてその君につかへた人であつたのです。信綱が立身したのは、無論その智慧の深かつたのにもよりますが、この至誠をつくしたといふことは一層あづかつて力があつたのです。至誠以つてその分を盡したといふことは、實にわれ／＼の手本とすべき所でありませう。

松平信綱は慶長元年十月二十九日に生れました。父は御代官大河内金兵衛久綱といひ幼名を長四郎と呼ばれてゐました。(三十郎といつてゐたともいひます。)六歳の時叔父にあたる松平右京太夫正綱の養子となり、これより姓を松平と名のるやうになりました。

慶長九年の七月といふに、家光の誕生があつたので、その月の二十五日に、長四郎の信綱は召し出されて、この家光公のお側づきになりました。はじめ三人扶持を頂いてゐましたが、後に二人扶持を増されて五人扶持を頂いてゐました。この時信綱は年九歳でありましたから、時々友だちと一緒に石垣の上へのぼつて危い遊びをしたり、或ひは廊下に隠れてゐて竈で女中を引き倒して喜ぶといふやうな、わるさをする事もありました。たゞその主君家光公につかへる有様は、どうして／＼八つや九つの子とは思はれぬほどまめやかでした。他のお側づきの子供などが、抜けて出て遊んだりなにかする時にも、自分は少しもお側を離れずつとめ、冬は蒲團を多く着す、夏は蚊帳

もつらず、たゞ忠實に仕へてゐました。

或る時信綱は臺所で食事をしてゐましたのに、急に家光公からお呼びであると聞いて箸をなげ捨て、膳を飛び越えて走つていきました。その時臺所には土井だとか青山だとかいふ身分の高い人もゐたものですから、父の正綱はそれらの諸老臣に對しても申譯がないと思つて、その不作法をひどく云つて聞かせました。すると信綱は、

『君のお召しであると聞いて、心がせき立つて、傍に居らるゝ人たちは眼にも入りませんでした。』

といつたので、父正綱も涙を流して信綱の忠實をよろこび、その心をはげましたといふことです。

或る夜のこと、家光の命を受けて、屋根の雀の子を捕らうとしてゐました時、足をふみはづして中庭へころげ落ちました。音を聞きつけて、秀忠公は火をともし出て來ました所が、中に信綱がゐます。

『どうしたのか。』

と問はれて信綱は、

『雀の子を捕らうと思つて屋根へ上つてゐました所が、足がすべつてころげ落ちました。』

と答へました。秀忠は、これはきつと家光から雀の子を捕れと云ひつけられたのだと思つて、

『だから雀の子を捕れと云はれた。』

と問ひましたが、信綱は白状しません。幾らなじり問うても白状せぬものですから、

秀忠は信綱を袋に入れて、これを軒につるし、

『白状せなければ、いつまでたつても許さぬぞ。』

といひました。それでも信綱は白状せず、遂に翌日になつて許されて袋から出しましたが、秀忠は信綱の後姿を見て涙を流しながら、

『我が子家光を助けるものはあの信綱である。』

といつて喜んだといふ事です。如何に信綱が主君のためを思つたかは、まだ十歳あまりであつた此の頃の行を見てわかります。

元和六年、信綱は二十五歳の時、領地五百石を賜り、同じ九年に三百石増されて八百石を賜はるることになり、御番頭といふ役をつとめました。つゞいて二十八歳の時從五位下に叙せられました。寛永元年になつて千二百石の祿をまさされ、都合二千石を賜はりました。こんな風でしたから、信綱は君恩の有がたいのを肝に銘じて、ますます忠義をつくして勤めてゐましたが、不幸にも病氣にかゝつて床につく身となりました。その間も片時といへども君を忘れるやうな事はありませんでした。そして自分はこの通り病氣のために出仕せざるのに、祿を頂戴するのはまことに恐れ多いといふので、御役の御免を願つて出ましたけれども、お許しがありませんでした。一年ばかりの後病氣もなほつて、再びお側につかへる事になりましたが、同じ寛永の四年に一萬

石を賜はり、七年には一萬五千石となり、同十年には三萬石の大祿を受けることになり、武州忍の城を賜り、遂に天下の老中となりました。時に年三十八、お側づきの一小役人から出世して、三十年ばかりの間に一代官の子が、肩を歴々の大名とならべて老中の筆頭となり、天下の政を執るやうになつたのも、ひとへに信綱が忠誠による所でありました。

寛永十四年十一月、切支丹宗門の徒が島原に亂を起して、その勢が甚だ盛で、これを征伐にいつた板倉重昌の兵もこれを滅すことがむつかしうございました。そこで幕府からは又々松平信綱を大將としてこれを征伐せしめました。勢烈しい切支丹の宗徒も遂に敵しかねて敗れてしまひ、信綱は目出たく兵を引き上げました。かくて寛永十六年正月五日、祿六萬石を賜はることになつて、河越城主となりました。

その後度々の手柄によつて、正保四年、年五十一歳の時には、封を常陸府中及び武州羽生の兩所に賜はつて、今は七萬五千石の大祿を食むことになりました。寛文二年三

月十六日、年六十七でなくなりました。

松平伊豆守信綱は、智慧伊豆といはれる程あつて、その奇智にとんでゐた事は、いろいろの話に多く残されてゐます。

或る日家光が鷹狩に出かける時、城の中の庭に大きな石が横はつてゐるのを見て、

『今日の夕方におれが歸つて来るまでに、あの石をとりのけて、あとに砂を布いて置け』

と役人に命じました。役人は人夫を集めて早速これを城の外へ取り出させようとしたが、何十人かゝつても容易にうごく石ではありません。よし無理にこれを動かすにしても、まづ城の塀を毀さなければなりませんし、それにまだ橋がこはれてしまふかもわかりません。なほ又それをかまはずやるにしても、とてもその日一日中にやつてしまふことは出来ません。どうしたものかと役人どもは頭をいたためて考へてゐますと、それを信綱が聞いて、

『さて、智慧を使はぬ人たちだわい。その石のまはりの土を掘りのけてしまつて、石を次第に落ちこませ、地の中へ埋めてしまへばよいぢやないか。』

といひました。これを聞いた役人たちは、

『成程さうだ。それにこしたよいやり方はない。うまい所へ氣のついたものだなあ。』
 といつて、大層感心し。多くの人天に命じてその通りさせ、石の下の土をどんく掘りのけますと、石は段々下の方へ下つて來ます。よい加減掘り下げて、その上へ土をのせて石がわからぬやうにし、砂を布いて掃除までちやんと出來上りました。夕方になつて家光が歸つて見ますと、如何にもたやすくのけられた様子ですから、そのわけを問ふと、役人がかく／＼の通りしましたと申し上げると、

『信綱でなければ出來ぬ事だ。』

といつて、大層ほめたといふ事です。

△勝安房

徳川氏の葵の紋はいや繁りに繁つて、その葉風は廣い蜻蛉洲に草木をなびかせてゐましたが、二百餘年の榮えも遂に夢と消えて、江戸城を官軍に渡さねばならなくなつた時、幕臣の一人として極力國家のために盡した勝安房は、身を貧家に起して倦まず屈せず學に志し、苦學の末遂に身を立てた人傑であります。幼時の彼れの行爲は吾々少年の誠によい手本であります。

勝安房は本名を義邦といひ、通例の名は麟太郎といつてゐました。幕府につかへてゐるうちは安房守と稱へられ、海舟といふのは維新後に呼ばれた名です。

海舟先生は文政六年二月十一日といふ日に、東京本所龜澤町の屋敷に生れました。家は代々將軍家に仕へてゐた旗本でありましたが、當時の將軍は徳川家慶でありました。西洋の船がポツ／＼と日本の海へやつて來て、世の中が何となく騒がしかつた頃なの

です。

將軍の直家來たる旗本ではありましたが、海舟の家は祿高が少く、大層貧しい暮らしをしてゐた上に、父は武士の事として家事向きのごことは一向頓着せず、身分不相應な借金が出来てゐました。それに父はこの借金を返済することも出来ぬうちに、遂に死んでしまひました。

あとに残された海舟は、その時やつと十七歳でありましたが、父のあとをついで家督を相續しました。所が父には多くの借金がありますから、その貸主は父が死んだといふ事を聞いて、海舟が相續するかせぬかで、四方八方から金の催促にやつて來ました。

所が海舟の家はどうでせう、極めて貧乏な暮らしをしてゐる所へ、父がなくなつてしまつたのですから、返す金の工面などはどうしたつてつきません。非常に困りましたが、海舟は貸主に向つて、

「御覽の通り貧乏な暮らしをしてゐました上に、此の度父になくなられたのですから、今直ぐといはれたつてどうする事も出来ません。併しながら、借つたものをそのまゝ捨て、よくやうな事は決して致しません。武士の面目にかけても、誓つて御返しをいたしますから、今暫くお待ち下さい。」

と、丁寧にしても男らしく云れたので、貸主も大層感心して、それを承知しました。それから海舟はつら／＼考へました。

「借りてゐた金を返さぬとは實に面目のない話である。これはどうしても返さなければならぬ。」

と心にかたく決心をして、或る商人に相談をして、祿を貰つた時に返すといふ約束をして、金を幾らか借り、これで前の貸主に返しました。

こんな風ですから、當時の海舟の家は非常に貧乏で、床の上に敷いてあつた疊はぼろ／＼に破れてゐる、天井の板も薪にしたりなどして揃つて残つては居らぬといふ有様

で、着るもの食ふものにさへ不自由な位でありました。こんな難儀な中にゐても、氣の強い海舟は少しも力を落すやうなことはありません。

『昔から艱難汝を玉にすといつてゐる。これ位な難儀に負けて氣をくじくやうでは男でない。』

と心の中に思つて、一生懸命に晝は劍術の修業をし、夜は書物を讀んで勉強をしてゐました。

一體この海舟の家は劍術の家柄だつたものですから、海舟は劍道の師範をしてゐた島田といふ先生の内へいつて、一心に稽古をしました。この島田といふ先生は中々豪い劍術家で、海舟に向つて、

『劍術を修業するには、たゞ形ばかりならつたつて駄目です。本當に劍術を學び心をねるには、私の家へ來るがよろしい。』

といはれたものですから、海舟はこの先生の塾へはいつて教へて貰ふことにしたので

す、併し劍術を教へて貰ふばかりではありません、朝晩には水汲みをしたり、家の内外の掃除をしたりなどして、晝間はヤーヤーと汗水ながして擊劍の稽古をし、夜は先生の命令で王子といふ所の權現様へ修業に行きました。この王子の權現といふのは宵の中こそ近所の燈も見えるし人聲も聞こえるので、そんなに寂しくもありませんが、追々と夜が更けて、近所の家の人も寢静まつてしまふと、何をいふにも深い繁つた木立の中の事ですから、しーんとして物凄いはかり寂しい所です。その頃は寒い冬のことでですから、つめたい／＼身を切るやうな風がびゅう／＼と音たてゝ吹きつけます。それに海舟は足袋もはかず、稽古着一枚で竹刀をひつさげてこゝへやつて行くのです。そしてその寂しい物凄い境内で竹刀を打ち振りながら汗の出る程やり、疲れてくると石段に腰をかけて休んで氣を落つけ、又寒くなると起ち上つて汗の出るまで竹刀をうち振ります。こんな事を何回もして繰り返して、夜明けになる頃塾へ歸るのです。毎日こんな事を續けて、身體と共に精神をも練りました。

かくて海舟の腕前も追々上達して來ました。或る時島田先生は海舟に向つて、『君の腕前も大分上達して來た、併し擊劍はたい技術をねるだけでは駄目だ。肝腎なのは膽力をねる事である。この膽力をねるには禪をやるが一番よい。』と勧めました。

そこで海舟は十九か二十の頃、牛島の廣徳寺といふお寺へいつて、坊様たちと一緒に禪の修業をしました。

かういふ風に海舟は貧乏に氣をくじくやうなことなく、一心に劍道を學びましたが、それが追々上達して來るにつれて、今度は日本の兵法ばかりでなく、外國の兵法も學ばねばならぬと考へて、和蘭の兵學を習はうとしました。

そこで蘭學の大先生と呼ばれてゐた箕作玄甫といふ人の所へいつて願ひました所が、この人は海舟が一時の出來心で深い考もなく來たのだらうと思つて斷つてしまひました。しかし海舟はそれで直ぐ氣をくじくやうな人ではありませぬ、今度は筑前藩の蘭

學者の永井青崖といふ先生の許へ行つて弟子となり、一心不亂に勉強をしました。何をいふにも蘭書といふのはまだ生れてから見たことも聞いたこともない言ばや文字で書いてあるものですから、なみ一通りでは勉強が出來ませぬ。たい先生から教はるばかりでは中々進みませんから、自分獨りで勉強しようと思ひました。獨りで勉強しようといふには字引が入ります、所がその頃はさうたやすく字引が手に入りませぬ。たとひ字引があつた所が中々安くは買はれませぬ。安くても五六十兩、今の金でいへば何百圓といふ大した金です。貧乏な海舟にどうしてこんな金が出せませう。それでも欲しくて／＼たまりませぬ。そこで海舟は和蘭流の醫者の赤城といふ人が、寶物のやうに大切に持つてゐる字引を貸して貰つて、一年に十兩の禮を出す約束で、これを寫しはじめました。

海舟がこの字引を寫すのには、なみ一通りの苦心ではありませぬ。何をいふにも家が非常に貧しくて、夏はつる蚊帳もなく、冬は重ねる蒲團もありません。その不自由の

中に、海舟は晝夜机にもたれて一心不乱に寫してゐました。所が不幸な事には、この頃母が大病にかゝりました。そこで海舟は御飯たきから掃除の事まで一人で引きうけ病氣の母の世話をしながら、暇のある時には字引を寫してゐました。かく苦心して寫したおかげで、一年の後にはその字引二部を寫しました。そして一部はこれを賣つてその代金で字引の借賃を拂ひました。この字引を寫す間に海舟は大層和蘭の言ばを覚え、和蘭の書物を讀むのにも上達して來ました。

一體この海舟といふ人は非常に本を讀む事が好きなのですが、何分貧乏なものですから買つて讀むことが出來ません。そこで近所にある本屋へいつて、店さきにならべてある書物を手にとつてちよいと讀んでゐました。この本屋の主人といふのが又大層感心な男で、

『ハ、ハ、ハ、あの海舟といふ人は本は讀みたいが買ふことが出來ないので、あゝして立ち讀みをするのだな。』

と思つて、遠慮なく本を御覽なさいといふことを海舟にいひました。海舟は本屋の主人に自由に本を見ることを許されたものですから大喜びで、丁寧になるべく損じないやうに本を讀んでゐました。

或る日のこと、いつもの通り海舟がこの本屋へいつて本を見てゐますと、一人の品のよい商人がやつて來て、主人と本のことを色々と話してゐます。やがてその主人が海舟に向つて、

『勝さん、このお方は濫田とおつしやる箱館の方で非常に本が好きなのですよ』と引き合されて、はじめて海舟とこの商人とは挨拶をしました。それから色々話してゐるうちに追々と心安くなり、濫田は、

『いろいろお話したいことやお伺ひしたい事がありますので、お差支がなければ一寸私の宿までお越し下さいませんか。』

との事で、海舟を宿屋へ連れて行きました。そして色々御馳走をして本の話や學問の話

さては四方山の話をしたあとで、この濫田といふ人の身の上話を聞くと、この人は箱館で大きな商業をやつてゐる人で、名を利右衛門といつてゐましたが、子供の時に自分の家の丁稚小僧たちと一緒に店で働いてゐましたが、生れつきの本好きで、暇を見れば二階や倉の中へ隠れて色々な本を見てゐましたが、親がこれを見つけて、

『あれは店で働くのが厭なのであんなに本ばかり見るのだらう。』

と思つて、非常にそれを叱つた上に、手足を縛つて二階へ上げておきました。所があちらこちらを見てゐると、つい近くに一冊の本が落ちてゐたものですから、濫田は兩足が少し弛んでゐるのを幸に、足さきで本を開いて見てゐました。暫くしてから親たちは、もう懲りてゐる事だらうと思つて、そつと覗いて見るとこの有様ですから、父もあきれてしまつて、

『それ程まで本が好きなのなら、本を見ることは許してやるから、一心に商賣をばげんで、その暇に本を読むがよい。』

といつて聞かせられて、それからは一層商賣に精出して、暇のある度に本を讀んでゐましたさうです。

海舟も亦自分の身の上話をして、苦學してゐることなどすつかり話しました所、濫田は大層感心して、本のことや金のことについて、お困りのことがあれば出来るだけ助けませうと、親切にいつてくれました。その日はそれで別れ、一二週間もしてゐるとひよつくりこの濫田といふ人が海舟の家へたづねて來ました。その日も二人は色々面白く學問の話などしましたが、濫田は歸る時に紙にのせたものを出して、

『これは失禮ですが本代になりとして下さい。』

といつて、二百兩の金を出しました。二百兩といへば今でざつと二千圓位にも當りませう、こんな大金を海舟にやらうといふのです。海舟は、

『いやこんな大金は頂くわけに參りません。』

といつて辭退しましたが、濫田は、

『そんな心配には及びません、私がつて居ればすぐ何かに使つてしまふのです。あなたの勉強のおたしに出来れば何より満足ですから、どうかしまつておいて下さ

い。』

と、たつてすゝめるものですから、海舟も厚く禮をいつてこれを買ひました。

澁田がこんな大金を贈つたのも、つまりは海舟の立派な精神に感心して、その苦學を助けたいと思つたからです。

これから海舟は何の心配もなく十分に書物も買ふことが出来て大そう勉強をし、小銃や大砲を作つて見ることも出来、とうとう幕府の蘭書翻譯を言ひつけられる身分となりました。つゞいて長崎に海軍傳習所といつて、今の海軍兵學校のやうなものが出来ましたので、そこへはいつて海軍のことを修業する事になりました。この時にも澁田のために色々世話になつたものですから、後に海舟が出世するやうになつてからは、この恩がへしをして、澁田のために大層つくしてやりました。

海舟はこの傳習所にゐた頃、一つ腕だめしをやつて見ようと、仲間の人と一緒に舟を海上はるかな所へ乗り出しました所が、折あしく暴風が起つて非常な難儀に出くはし、すんでの事に命もとられてしまはうとした事もありました。

万延元年といふ年に、幕府から亞米利加合衆國へ使を遣らうとして、それには軍艦も一しよにやらうといふ相談が出来かけましたが、何分にも太平洋を横ぎつて行かなければならぬのですから、航海の事を習ひ初めの日本としては、中々相談がまとまりません。齒がゆく思つた海舟は直ちに江戸へ歸つて幕府へ書面を出し、外國へ使をやるのならば是非とも自分の國の軍艦にのせて、自分の國のものゝ力で行かせて貰ひたいといふことを願ひました。そこで咸臨丸といふ小蒸汽船がこしらへられて、これに使をのせ、北アメリカ合衆國へ航海することになりました。そしてその艦長は海舟に言ひつけられました。中四間に長さ二十七間といふ小さい咸臨丸にのつて、あの廣い太平洋を、しかも航海の事をならひかけて間もない我國の人の腕で渡つて行かうとい

ふのは、實に大膽極まることでありましたが、途中の危険も通りこして、遂に無事で合衆國の桑港へ着きました。

海舟は合衆國へいつていろくその國の文明の有様を見て、一月あまり後に桑港を出て、無事日本へ歸つて來ました。

文久二年に海舟は軍艦奉行といつて、今でいふと海軍大臣のやうな役につけられました。時に年三十九でありました。

かうしてゐるうちに、日本では尊王攘夷の論が盛になり、はては討幕の論さへ持ち上つて、世間は非常に騒がしくなつて來ました。海舟は熱心こめて我が國のため將軍のためにつくしましたが、海舟の心を知らぬ幕府の役人は兎角海舟をわるく思ひ、又朝廷の方につかへてゐるものの中にも海舟を疑ふものがあつて、幾度も刺殺されようとした事さへありました。海舟は心のうちで、

「おれは何時人のために殺されるかわからぬ。併し自分の身の上を氣づかつてゐるや

うでは、國のために盡す事は出來ぬ。命位は少しも惜しくない。』
と思つて、たゞ誠心こめて力をつくしてゐました。その頃海舟は毎日禰裨を着かへて、何時殺されても見苦しくない用意をしてゐたといふ事です。如何に海舟が命を惜しまず、國のために盡さうと思つてゐたかは、これを見ても知る事が出來ます。

その後維新の際には大いに國家のため幕府のために働いて手柄がありました。徳川將軍慶喜が職をやめてからは、自分も氷川の屋敷に引つこんで滅多に外には出ず靜かに世を送つてゐましたが、明治二十年に華族に列せられ、伯爵を授かり、從三位に叙せられてゐましたが、續いて二十一年には樞密顧問官に任せられ、二十二年には勳一等瑞寶章を授かり、三十一年には勳一等旭日大綬章といふのを授かりました。明治三十二年一月二十一日、年七十六で遂になくなりました。

△高島秋帆

山崎闇齋はかつて自分が貧しい家に生れて、安佚に流れずに育てられたのを幸福としました如くに、人はとかく富貴の家に生れると、父母はじめ四方八方から大切に育て上げられ、食べたいものは食べ、着たいものは着、勝手氣儘をして大きくなるものですから、意氣地なしの骨なし人間となつてしまつて、遂に世のために何のつとめもせず死んでしまふやうな事になりやすいものです。

所がこゝに身はゆたかな家に生れながら、安佚にふけるといふやうな事は少もなく、文武兩道にはげんで大いに心身をねり、軽い身分でありながらも國を思ふ誠はあつく、日本國のためを思つて大いにつくし、多くの財産をなくするもかまはず、死に至るまで東西に奔走した人があります。

徳川幕府の末にあたつて、火技の中興洋兵の開祖として世に知られた高島秋帆先

生は即ちその人であります。

高島秋帆は寛政十二年に長崎に生れました、秋帆といふのは號で、本名は四郎太夫といつてゐました。父は長崎の町年寄の上席でした。町年寄といふのは長崎の市中を取締る外に、外國貿易の事も取締つてゐたものですから、中々勢力もあるし給料も多くその上貿易の利益金の中からたくさん配當金を受け、その外色々な収入があつて、身分はあまり高くはありませんが、家の暮しは十萬石二十萬石の大名にも劣らぬ程の暮しが出来たものです。その中でも高島家は上席だつたものですから、家は何不自由なく暮せる身分でありました。

こんな風ですから、その頃の町奉行は世の太平になれて、自分の家が富み榮えてゐるにまかせて、子供たちにもあまり厳格な教育はせず、氣儘に育てゝゐたものです。高島家は長崎御鐵砲方鐵砲師範となり、長崎奉行取締の砲臺を預り、長崎奉行直支配の鐵砲組番士を預つてゐたものですから、中々氣儘勝手に育てゝおくやうな事はせず

秋帆が十二三の頃から砲術を教へ込みました。秋帆も亦、自分の父と同役の家の子たちが氣儘して育てられて居るのを見て羨しくも思はず、たゞ一心に稽古をしたものですから、十七八の頃にはもう一人前の腕前になつてゐたといふ事です。かく武事の方は父から教へられて上達しましたが、生れつき學問が好きで、あまり父からすゝめられもせぬのに、自分から進んで色々な書物を讀み、砲術稽古の暇には町の讀書の先生について大學中庸論語孟子などいふ支那の孔子や孟子の教を書いた書物を習ひ、又支那の歴史の本や兵法の本なども勉強してゐました。又先生について學ぶものゝ他にも自身で多くの書物を研究してゐて、中でも奇効新書といふ支那の兵書は特に喜んで讀んでゐたといふことです。秋帆は富んだ家に生れてゐながら、祿々勉強もせず働きもせず一生を終るやうなつまらぬ者を眞似ず、かく苦心をして砲術も學び學問にも身を入れしました。

かくして秋帆が十七歳になつた時、父がなくなりましたので、父の職をついで町年寄

となり、御鐵砲方かね務めることになりました。普通の財産家に生れたものならばまだ十六や十七の年では何も彼も人まかせにして、召使の者や親たちにはかりたよつて、何一つ出来ぬものが多いのですが、秋帆は父の職をついで勤めました所、年こそ若かれ少しの手落もなく務めたものですから、二十一歳の時には會計のことを掌る長崎會所調役に上げられました。これも亦まちがひなくよくつとめて、上役の奉行からは、

『秋帆は年は若いがかつかりした男だ。あの男なら何をさせてもうまくやる。』

といつて信用せられ、又下役の者からは尊敬せられて、

『年に似ぬ腕きゝの人だ。』

と感心せられてゐました。

所がこゝに一つ面白い、しかも感心な話があります。秋帆がはじめて江戸へ上つて行

きた時、或る日氣がふさぐものですから、その氣はらしに料理屋へいつた事があ

りました。折ふし夏の事ですから、着てゐる羽織は大層薄くて、秋帆が腰にさげてる煙草入れが見え透いてよくわかります。そこで料理屋の男が、一つ秋帆をかついで笑はうと思ひ、面白半分に、

『只今この門で煙草入れを拾つたものがございます。その煙草入れは又非常なねうち物で、金唐草に金無垢の金物をうち、珊瑚珠の八分程の緒締にウニロールの根付を附けた結構な品物で、まあ代價にしますと二百圓あまりもませう。いやどうも運のよい者もあつたものです。その代り落した人は嘘かし困つてゐる事でせう。』
と、ペラ／＼しやべりました。秋帆は心のうちで、さういふ煙草入れは自分の持つてゐるのと少しも違はぬが、若しや自分が落したのではないか知らんと思つたものですから、何氣なくふと手を後へまはして、腰の煙草入れを下げてゐるあたりを撫でたものですから、その男は、

『今日こそうまく旦那をだましましたよ。』

といつて笑ひだしましたものですから、秋帆はさては一ばい喰はされたのかと思つてしばらくは顔を赤らめてゐましたが、やがて腰からその煙草入れをぬきとつて、中に入れてゐた煙草を紙の上へあけ、その煙草入れを男の前へ出して、

『これをお前にやる。』

といひました。男はじめ、そこにゐたものは、

『さてはつまらぬ事をしやべつたために機嫌をそこねたのだらう。』

と思つて、いろ／＼言わけしたり、あやまつたりしましたが、秋帆は笑ひながら、

『いや／＼、おれはお前にかつがれて腹を立てゝゐるのではない、この煙草入れはたかが百兩か二百兩の品物だ。これがあつてもなかつてもおれに別にさしつかへがないし、又身代にさはりが出来るといふのでもない。それにおれがこの品物を惜しいといふ考があるから、今お前に心底を見すかされて腰をさぐつて、男にあるまじき振まひをしたのである。おれは早くから父にわかれて、氣儘にくらしたためにこのや

うな贅澤な品を持つやうになつたので、われながら恥づべきことである。こんなものは以後決して持つべきものでないといふ事を今日はじめて悟つた。實に今日はよい教訓を得たので我れながら嬉しい。ついてはその禮としてこれをお前にやつてしまつて、おれは最も安い煙草入れを持たうと思ふのだ。今この江戸で一番價の安い煙草入れは何といふのか。』

といひますから、

『一つ五十文の油紙の煙草入れが一番價が安うございます。』

と答へますから、

『それならおれは今日からその煙草入れを持たう。それを買つて来てくれ。』

といつて、それから後はもうよい煙草入れは一切持たず、この油紙の煙草入ればかり持つたといふことです。

これ位ですから、それまでは普通の人から見ればあまり粗末のものを着たりまづいも

のを食べて居らなかつたのでせうが、併し秋帆の家の財産からくらべて見れば、決して奢りすぎた程でもなかつたのです。それを年とるにしたがつて、

『いくら家に金があるからといつて、むだなものに多くの金をかけたり、よい物を食たりするのは實につまらぬ事だ。』

と考へたものですから、この通り儉約に氣をつけるやうになつたのです。

この後秋帆は、外國の船が我が國の海岸へやつて来るやうになつてから、我が國の事を非常に心配して、大砲の改良のことや海防の事を幕府へ申し上げたり、西洋人について、西洋の兵式のことを學んで、西洋式の小銃や大砲のよいことを唱へてそれを準備することなどを申し上げ、國の事はかり心配して色々骨を折り、自分では又和蘭に注文して小銃五十挺、大砲十三門を所持するやうになりました。これも自分の家のために買ったのではなく、我が國の兵制改良の手はじめと、かねては國防のためにも思つて買ったのですがこのため家の財産も餘程なくなりました。

後人の讒言によつて獄に入れられました。嘉永六年に許されて幕府のさむらひを教へてゐましたが、慶應二年になくなりました。明治二十五年に朝廷から正四位を贈られました。

▲ 岩崎彌太郎

人となり豪宕、いやしくも一事をしようと思つた以上は、必ず成功せしめねばおかず、艱難に出逢へばますます勇氣をおこして事業をなしとげ、しかもその性質は父母に孝であり兄弟に友であり、親戚朋友はいふに及ばず、人に對してどこまでも親切を旨とし、また節約を行つていさゝかの費用も輕んずるやうなことをせず、しかも人を救ひ世を益するためには、萬金もをしますなげうつた、岩崎彌太郎は、我が國の海上王とまでいはれただけであつて、實に立派な實業家でありました。

幼い時から如何に意志がつよく、いかに志が大きかつたかは、その傳を讀めばよくわかる所であります。

土佐國安藝郡井の口村から少しはなれた所に、妙見山といふ山があります。この山は松だの杉だの檜だのといふ大きな樹が一面に生へ茂つてゐて、晝さへ物すごい程うすぐらく淋しい所でありました。たゞさへ物淋しいこの山の中に、なほ淋しさを添へてゐるのは、一つの古い宮であります。宮といつても立派な宮ではありません、軒はかたむき屋根は破れ、柱も床も満足な所はない程いたんで、たゞ荒れるにまかせてあるのです。こんな風ですから、誰れも參るものもなく、近くの村の人々は、この宮を天狗様の住家だといつて、皆がこはがつてゐました。年よりの人たちも、

「妙見山へ行くなよ。妙見山には天狗があるから、あんな所へ行くと天狗につかまれて食はれてしまふぞ。」

と、始終子供たちに言ひきかせてゐました。

天狗などいふものが何處にゐるものですか、そんなものはどこを探したつて居るものではありませんが、昔は天狗などがゐるといつて大層こはがつてゐたものです。この妙見山にも天狗がゐるといふので、その邊の子供たちはもうほんととばかり思つてこはがつてゐたのでせう。子供ばかりでなく、その時分の事ですから大人や青年までが恐ろしがつてゐたのでせう。

そこで村中にいろ／＼評判が高まりました。

『この節妙見山には化物が出るさうだ。何でも天狗と口喧嘩をやつてゐるさうな。』
といふものがあれば、又、
『妙見山に出る化物は狸が人間に化けてゐるのだといふ事だ。いつかもこの狸の化物が堂の中で踊つてゐたさうな。』

といふものもあれば、
『何さうでない。あそこにあるのは天狗ばかりで、去年この天狗に子が出来て、天狗

のかすがだん／＼ふえて來るといふ事だ。』
などといふものもあります。

或る晩、村の若者が四五人集まつて、例の妙見山の化物の話をし、互にやかましく云ひ争つたあげく、ある一人が、

『論より證據といふ通り、いくら口で争つて見たつて仕方がない。今から一つ妙見山へいつて、その化物の正體を見とゞけて來ようぢやないか。』

といひ出しました。

『そりや面白い、やつて見よう。』
といふものが二人あつて、この三人の者たちもいよいよ妙見山へ行つて、化物の正體を確かめようといふ事になりました。併し人が恐ろしがつてゐる化物の事ですから、どんな目に逢はされるかも知れぬといふので、三人の者はめい／＼棒や鎌や鐵砲などを手に持つて、いざといふ時にはこれで化物と戦はうといふ意氣こみで、妙見山さして

出て行きました。

その中もう日は全く暮れてしまつて、あたりは眞暗闇となつてしまひました。空には多くの星がきら／＼とか／＼やいてゐます。その星の光をたよりとして、三人は山道をたどつて妙見山の方へ急いで行きました。宮の近くまで来ると、あたりは樹がしげつてゐて、一寸さきもわからぬ位です。若者は三人までも連れ立つてゐるのですが、もう山道にかゝつてからは、恐ろしくて／＼たまりません。今にも化物が出て来るのではないかと、氣味がわるくて仕方がありませんが、手には鐵砲やら鎌をもつてゐるものですから、まづそれを力にたのんでん／＼と上つて行きました。やがて妙見さまの宮の前の石段のほとりまで来ると、天を突くやうな木立が森々としげつてゐます。時々山の中で何か走るのか、カサ／＼と音をさせたり、又は樹の枝でも妙ななきごゑの鳥がギャーと叫んだりします。三人はその度に化物だないかと、胸ををどらせました。

『もうこの邊なら化物が居りさうなものだな。』
と一人がいふと、

『さうだ、この邊でも出るだらうよ。しかしまあ兎に角本堂までのぼつて、本堂の縁の下に隠れて見とけようぢやないか。』

と一人がいひました。そこでまづ兎に角本堂まで上つて見ようといふ事になつて、石段を上つて行きますと、やがて下の方に妙な足音が聞こえました。

『おい／＼、あの足音は化物にちがひないよ。』
と一人の若者がさゝやきました。

『早くかくれよう。』

といつて、三人は本堂の縁の下へもぐり込みました。そして息をこらしてうかつてゐますと、何だか下駄をはいたやうな足音ですから、

『おや／＼、あの化物は下駄でもはいてゐるのだらうか。』

『何だか小さなこゑで歌のやうなものをうたつてゐるわい。』

『天狗は歌などうたふのだらうか。』

など、ひそく小聲ではなしてゐますと、やがて黒い影がぬつと石段の上にあらはれました、すかして見ると、何だかその恰好が子供のやうな形です。こりやをかしいぞと思ひながらも、まだじつとうかゞつてゐますと、黒い影はやがて本堂の中へはいつてしまひました。三人はまだ動かすにうかゞつてゐますと、それきり何の音もしませんから、

『はて、今のは子供のやうだつたがどうしたのだらう。矢張り天狗か何かで自分の巢の中へはいつたのだらうか。』

などと思つて、三人はそつと首をのばして中をのぞきますと、中には一人の子供が身うごきもせず、板の間に坐つてゐます。なほよく見ると着物の袖や、袴をはいてゐるのなどもぼんやりわかります。

『何の事だ、化物と思つたのは子供だよ、子供にちがひない。』

とさゝやいて、三人はそつと二足三足近よつて見ますと、化物と思つたのは、井の口村の郷士岩崎家の子であります。

若者はおぼえず、

『やお彌太郎さんか、びつくりさしちやいけませんよ』

と叫びました。

この化物だと思はれた岩崎家の子こそ、後に我が國の海上王といはれた岩崎彌太郎であつたのでした。

彌太郎は子供の時から、しつかりした精神を養はうと思つて、自分の家から程遠からぬこの妙見堂へ毎夜毎夜かよつて、本堂の板の間に正坐して、心を静め心膽を練つたのでした。

これが彌太郎の十四五歳の時のことでしたが、その後國を出る時にあたつて、この堂

の壁に、

『英名不轟天下』

再不登此山』

と書いて、自分の成功をちかつたといふ事です。

この彌太郎は七歳の時から學問をはじめ、十一歳の頃から詩なども稽古しました。十四になつた年藩主に召されて、その前で詩を作つて、

『この子は年が行かぬが中々の才のある子だ。』

といつておほめに預り、お金を頂いたことがありました。その後まもなく故郷を出て高知にゆき、そこで學問をしました。

安政元年には年二十一でありましたが、この年江戸へ上つて勉強しました。所がその翌年になつて、父が村吏と争つたために無實の罪を受けました。このことが知れたものですから、親思ひの彌太郎はびつくりして、直ぐ様江戸を出て、夜も晝も歩きどほしで、僅か十二日で故郷へかへりました。今でこそ汽車汽船があつて便利ですが、そ

の頃江戸から土佐まで十二日や十三日で歸らうとするのは、中々容易のことではなかつたのです。これを聞いた近所の人々は、その孝行の心の深いのに感心せぬものは一人もありませんでした。

故郷に歸るやいなや、直ぐ郡奉行の役所にいつて、父の無實の罪を訴へましたが、この奉行はもとから村吏と言ひ合してゐたものですから、その訴を取り上げてくれません。彌太郎はもう不平でたまりませんから、或る時そつと役所の門口へ行き、その柱を削つて、

『官以三賄賂一成獄』

因三愛憎一決訴』

と、筆太に書きつけました。

これを見た奉行は非常に怒つて、直ぐ削らせてしまひました。すると彌太郎は又もおなじ事を壁に大書しました。奉行は非常に怒つて、こんどは彌太郎を引つ捕へました。そして、

『その方はよもやこれを書いたのでなからう。』
と問ひましたが、彌太郎は口をつぐんで答へません。奉行は又同じ事をたづねました
すると彌太郎は、

『あれを書いたのは私です。』

と、はつきり答へました。そして父の無實の罪を訴へて免して貰ふやうにと頼みまし
たが、中々聞き入れられません。その上罪にあてられて、家から外へ出ることを止め
られました。しかし此の頃から彌太郎の名は世間に知られて、吉田東洋といふ人から
色々世話を受けたり、後藤象次郎や坂本龍馬などいふ名高い人々と交際するやうにな
りました。

間もなく罪を許されて、安政五年に藩の命を受けて長崎に行き、外國人の風俗や様子
を探ることになりました。

慶應二年、歸つて藩につかへ、開成館に入つて學問に關する方のことをつかさどつて

ゐましたが、後又藩の命を受けて長崎に行き、通商の事をつかさどりました。この頃
土佐藩には持船が多くて、このためにたくさん費用がいりました。當時は維新の際
であつて、國の費用が非常に多かつた頃のことですから、土佐藩の方ではこの船を持
ちあぐんで、その保管のことを彌太郎にまかしてしまはうといふ事になりました。

彌太郎は大喜びでこれを引き受け、九十九商會といふ運送會社をおこし、運漕の業を
開きました。これは藩の船を以て商賣をし、何か藩に事がおこつて、その船の入用の
事がおこれば、それを藩へかへして軍の用にしようといふのでありました。これが後
に航海運輸の業を開き、海上王黄金王と稱せられるやうになる基となつたのです。

前にもいつた通り、この頃は國事多端のために、土佐藩も金銭が不自由がちでした。
それですから彌太郎は大いに力をつくして會計をととのへ、通商を開いて預つてゐた
船をかへし、自分が儲けてゐた金數萬圓を献納して、以つて藩の財政をととのへまし
た。これが明治四年頃のことでしたが、更に自分で多くの船を買ひ入れ、大阪に出て

汽船運漕會社をたてました。これが今日の日本郵船會社のもとであります。

明治七年、佐賀の亂が起つた時に、政府の命を受けて戰地廻漕の業に従事しました。ついで臺灣の役が起つた時には、政府が新たに買ひ入れた數隻の汽船をまかされて戰地廻漕の事にしたがりひました。役の終つた後、上海の方へ通ふ航路を開いて、盛んに航海をやつてゐましたが、たまく太平洋汽船會社といふのがあつて、我が國の近海を航海してゐましたが、これが彌太郎の會社と競争しかけました。はげしい競争の末、彌太郎は遂にその競争にかつて、太平洋汽船會社は倒されてしまひました。そこでその會社の船舶を買ひとつてしまひ、なほ盛んにやる事になりましたが、こゝに又郵便汽船會社といふのが倒れて、政府はその船舶のすべてを彌太郎に託し、郵便運漕の事業も共にまかせました、こゝに於てその會社は一層大きくなつて、これから郵便汽船三菱會社の名がおこりました。

明治九年、英吉利國のピーオー會社といふのが、横濱と上海との間に新たに航路を開

いて、大いに競争をしましたが、彌太郎はまたこれにも打ち勝つて、それを倒してしまひました。

明治十年、西南の役が起つた時には、その船をすべて内海の運漕にあて、軍用に供して大いに功がありましたので、戦役が終つた後勳四等に叙せられました。

かくしてその翌年には北海道方面へ行く航路を開き、その翌年には又香港へ行く航路を開き、かくて一意専心わが國の航路を擴張發達せしめることにつとめました。

岩崎彌太郎はかくして奮闘に奮闘をかさねた末は、遂に我が國の海上王といはれ黄金王といはれるやうになつて、巨萬の富を得たのでした。しかしながらたゞ金をためるのばかりにつとめたのではありません。元來この彌太郎の人となりはどこまでも事をやりとげようといふ氣が強く、難儀にあへばあふ程勇氣を出し、かりそめにも落膽して氣をくちくやうな事はなく、父母には孝行で兄弟の仲もよく、親類朋友はいふに及

ばす、すべての人に對して親切を旨とし、またつとめて儉約を行ひ、いさゝかの費用も輕んずるやうな事はありませんでしたが、人を救ひ世を益するためには、數萬の金も惜しまず捨て、學校をこしらへたり文庫を設けたり、或ひは教育のために多くの金を出し、貧しい人々を助けるやうな事などはきはめて多くありました。明治十七年六月、遂に病んで死にました。時に年五十二でありました。

修養少年立志篇終

大正二年十月二十日印刷
大正二年十月廿五日發行

不許複製

著作者 森 脇 紫 選

發行者 大阪市東區安土町四丁目十二番地 武田 福藏

印刷者 大阪市南區長堀橋筋二丁目廿六番地 磯野 利木 松

修養少年立志篇

定價金四十五錢

發賣元

大阪市東區安土町四番 武田交盛館
振替大阪四一〇九番
東京市神田美土代町 富田文陽堂
振替東京三三〇七番

教育學術研究會著

國語 漢文 自習新辭林

ポケット形總クロース美製本箱入全一冊
總語數一萬八千〇 總紙數六百七十餘頁
定價金四十五錢 郵税金八錢

尋常高等小學校の國定教科書中にある漢字及其の語句の解しにくいものを簡易に會得せしめん爲に前に「學生自習新辭典」を著せしに頗る高評を得て汎く歡迎せられました。これは漢字を字畫に由て引くもので言葉によつて漢字を知り其の意義を解すると云ふことは語音のいろは引でなくてはなりません。依て教科書中の文字を五十音にて引き其意義を説明したのが此書です。又讀書の参考となるばかりでなく作文に最も必要ですから自習新辭典と共に座右にせば眞に自習に適ふを信じます。

教育學術研究會著

學生自習新辭典

ポケット形洋裝總クロース美製本
箱入全一冊 紙數六百餘頁
定價金四拾錢 郵税金六錢

此書は小學校の尋常及び高等科の國定教科書にある漢字を本としこれに尋常中學校高等女學校の第二學年まで及びそれと同じ程度の教科書中の漢字を合せて音や訓は勿論其文字をはたらかず語句を集め畫引には生徒諸君の爲に新しい索引をつけ扁や冠の解釋も附てあります。誰にでも引くことができ、尙ほ畫引の終りに普通の國語や俗語の辭林と字音假名遣ひも載てその内容のすべてが自習の新辭典たる名にそむかざるは此の書の特徴であります。

文學士吉丸一昌著

精神 修養 修身訓話 全一冊

四六版形定價金參拾五錢 郵税金六錢
國民修身の綱領は教育の勸諭によりて示させ給ひしと云へ共これを躬行實踐せんは頗る難事に關せり本書は忠孝友愛信義公益奉公遵法より啓蒙成徳に至るまで詳説したる書なり

文學士吉丸一昌著

精神 修養 立志訓話 全一冊

四六版形定價金參拾五錢 郵税金六錢
本書は古今人の立志の蹟を詳かにしてこれに似んことを期せしものとす幸に精神の修養に資し立志の範となすを得ば著者の勞徒ならざるなり

文學士吉丸一昌著

精神 修養 武士道訓話 全一冊

四六版形定價參拾錢 郵税金六錢
本書は専ら教育勸諭に副せんことを期し精神の修養を骨子として古今偉人の事蹟を集め成したるものなれば武士道を鼓吹するに於て餘りあり

森脇紫運著

故事 俚諺 教訓物語 全一冊

最新洋裝美本定價金五拾五錢 郵税金八錢
よく「奇想天外より落つ」といふがこれは俚諺に對して最も適當な語である諺の中には随分思ひ切つたものもあり想像力才の驚くばかり巧みなものもあり又世の中の缺點などを實に旨く穿つてゐるものがある。本書はその俚諺故事數百についてお伽嘶風の趣味ある書き振りで解釋敷衍したるもの少年青年諸君はじめ一般家庭の好讀物である。

森脇紫運編

青年 修養 と娛樂 全一冊

最新洋裝美本定價金五拾五錢 郵税金八錢
良薬は口にながして飲むにたへず美味なる河豚の肉には毒ありと聞く本書は河豚の肉に眞薬のきく目をもたせて青少年學生諸君の頭腦の食物たらしむべく現れたるものなり眞面目といはず滑稽といはず高尚といはず卑俗といはずすべて修養なり娛樂となり時に思はず洪笑する事あり一讀胸に針す其諷立の様々本書に就て見給へ。

發行所 大阪東區安土町 大田武盛館

發行所 大阪東區安土町 大田武盛館

森脇紫逕著

揭示と訓話の資料

●菊判形全一冊 ●正價壹圓參拾錢
●總クローネ綴 ●特價壹圓拾錢
校庭の揭示が兒童をして教科書外に智
識を養ふに効益あるは世の定評あり
なり本書は著者か數年の經驗より得た
る極めて興味あり趣味あるものを選
せしものにして類書中無比の良書とす

訂増 手工科教材

正價金壹圓
送料金八錢

●菊判形總クローネ綴彩色圖挿入
本書は兵庫縣師範學校教諭山田春耕、
大阪府師範學校教諭萱島吉太郎兩氏の
共著にして教授の方法材料の供給に富
み斯界の巨擘として歡迎せられし良書
たるは既に公評あり取材するに足る

小學校理化學實驗

●菊判形洋裝 ●定價六拾錢郵稅八錢
本書は高岡清太郎氏が簡易なる裝置に
より理化學を實驗するに便せん爲め遺
憾なく指導せられし適實の良書なり

漢文學の新義

信夫恕軒、石崎篁園兩先生解

正文章軌範通解

●三六版總クローネ全三冊箱入
●定價金壹圓五拾錢 ●送料金八錢
本書は漢文學の泰斗たる信夫石崎の二
先生が各段落毎に講解せられたるもの
にして附するに字解を以てす講究の士
これに精加ば蓋し獨歩の快を得べけん

軒渡邊復著

活用論語通解

●三六版洋裝美本全一冊
●定價金七拾錢 ●郵稅金六錢
書を讀んで活用せすんば讀まざるに如
かす此書は道徳の主篇たる論語を今日
の社會に活用せしむべく講解せしもの
にして尋常一様の解釋ならざるをこれ

禮的講子

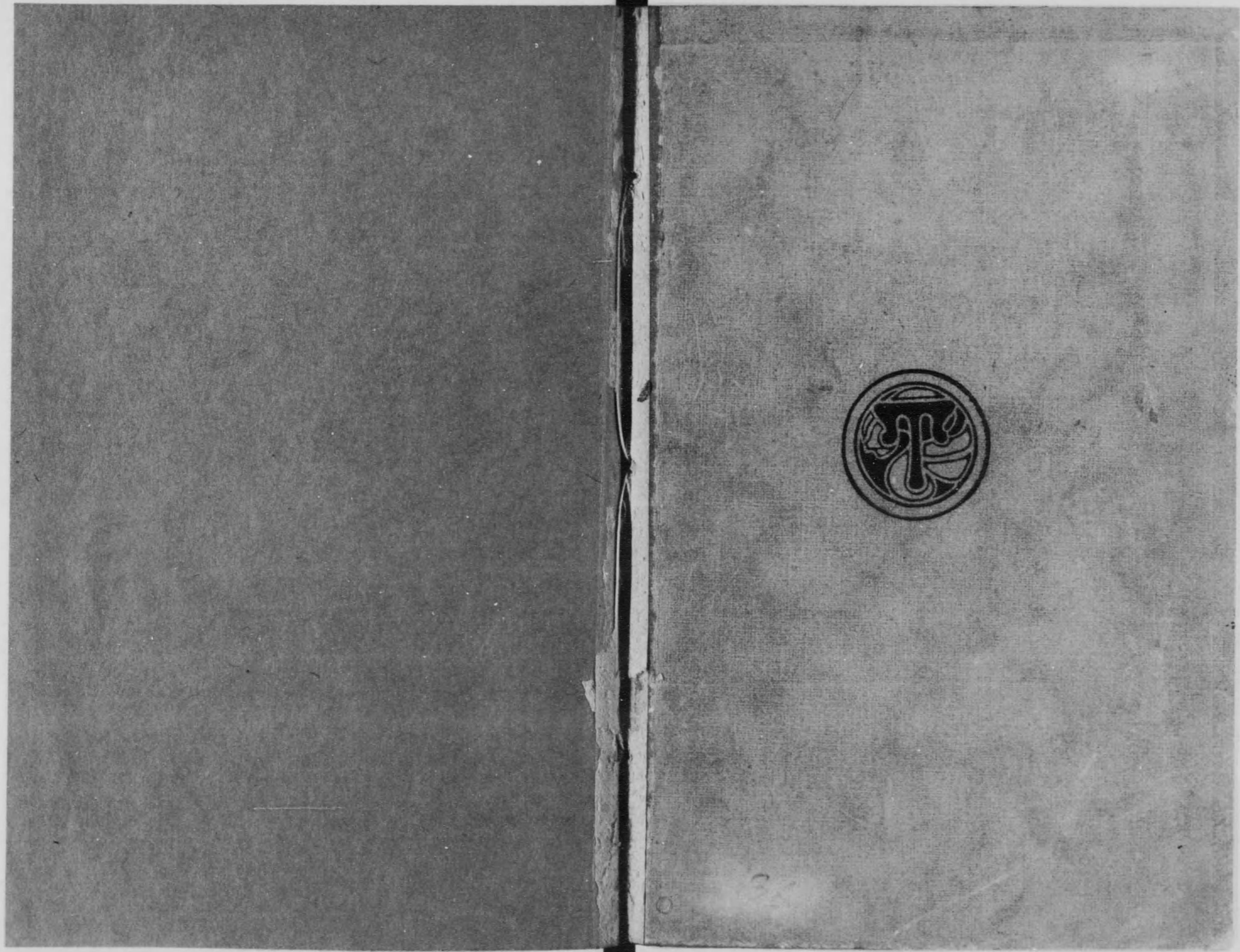
菜根譚講義

●三六版洋裝美本全一冊
●定價金五拾錢 ●郵稅金四錢
字々肝に銘し首肯緊に中れる菜根譚
しかも今日の社會に裨補するや大なり
日常の侶として處世の指針とせずや

發行所 大阪東區大町 武田交盛館 振替 貯金 大阪 九〇一

275
55





275
52

終

